

的場 績, 2008. ゾウムシ雑記 27, KINOKUNI, (74): 14-16.  
 森本 桂, 1984. ゾウムシ科, 林 匡夫・木元新作・森本 桂,  
 (編), 原色日本甲虫図鑑 (IV): 269-345, 53-68pls. 保育社,  
 大阪.  
 中村裕之, 2009. 東京都でシラフクモゾウムシを採集, 月刊  
 むし, (464): 47.

(黒田悠三 624-0851 舞鶴市大内野町 47-3)

### 【短報】ホソキボシアオゴミムシ幼虫の採集記録と生態等について

ホソキボシアオゴミムシ *Chlaenius (Lissauchenius) rufifemoratus* (Macleay, 1825) は, 日本では大隅半島と屋久島以南の南西諸島に分布するアオゴミムシで, 笠原 (1984) により, 従来チュウジョウアオゴミムシ *C. (L.) chujoi* Jedlicka, 1946 として報告されていたものは本種と同定されている。

本種は顕著な美麗種で, 個体数が少ないことなどから比較的多くの報告や論文に取り上げられている。成虫は他のアオゴミムシ類と異なり樹上性で, 葉上などから採集されることが多い (笠原, 1980; 黒沢, 1975; 松本, 2000)。

筆者は与那国島において本種の幼虫を採集し, 成虫を羽化させたので若干の生態観察と合わせて

報告する。

#### 採集データ

1♂ 幼虫 (図 1), 沖縄県与那国町宇良部岳 (標高 130 m), 24. IV. 2017, 筆者採集・飼育。

宇良部岳の登山道沿いをビーティングしていたところ, 山頂手前約 1,000 m 地点の地上 1.5 m ほどのススキの葉上から幼虫 2 頭が落下した。採集時はいずれも終齢と思われる。数センチ角のプラスチック容器に入れて鱗翅目の幼虫を与えたが, 1 頭は餌として与えた幼虫が吐いた糸に絡まって死亡してしまった。もう 1 頭の個体の腹部は長く伸び, 体長 13 ~ 14 mm ほどあって満腹状態と思われる。しばらくは摂食しなかったが約 3 日後, 幼虫は自分と同等かそれ以上の大きさの鱗翅目幼虫 1 頭を捕食した。

本種は与那国島では成虫もススキの葉上で生活し (笠原, 1980), 2016 年には筆者も同じく宇良部岳の山頂から 480 m 手前の同様の環境 (標高 180 m) で成虫を採集している。この時はタイワンアトボシアオゴミムシ *C. (L.) bimaculatus lynx* Chaudoir, 1856 の幼虫も近くで採集した (須田, 2016)。こちらの成虫は地表で生活するが, 幼虫の生息環境は本種とよく似ているようである。

与那国島で採集活動をされておられる長瀬正義氏の話では, これら 2 種の幼虫は春から初夏にかけてビーティングで見かけることがあり, タイワンアトボシアオゴミムシの方がより多く見られるとのことであった。

今回, ホソキボシアオゴミムシは同日に同町久部良方面で成虫 1♂ も採集されており, 羽化時期には幅があるものと考えられる。また, タイワンアトボシアオゴミムシは 2017 年 4 月 24 日から 28 日にかけて同町各所で成虫を採集しているが, 2016 年の羽化脱出日は 6 月 4 日であったことから, 羽化時期にはやはり幅があることがわかる。



図1. 幼虫 (4月27日)。



図2. ヒラタアブを摂食中の成虫 (5月18日)。



図3. 鱗翅目幼虫を摂食中の成虫 (5月19日)。

4月29日に帰宅して水はけの良い黒土等を入れた小型の水槽に幼虫を放すと、翌30日には土中に潜っていた。3日に一度くらいの割合で水分を補給し、室内で保管した。

容器はほとんど毎日観察していたが(5月14日～16日を除く)、5月17日に羽化脱出した成虫を確認した。2～3日早く地表に出ていた可能性もあるが、幼虫の採集から羽化脱出までの過程は2016年のタイワンアトボシアオゴミムシとほとんど同じである。

成虫の生態に関しては、松本(2000)に詳しいので簡単な観察にとどめ、生息場所を模したような飼育環境づくりはしなかった。成虫はきわめて活発に土壌面を歩行し、土の隙間に潜る行動をとる。餌としてはヒラタアブ成虫、キンバエ成虫、鱗翅目幼虫を弱らせた状態で与えた(図2, 3)。いずれも外皮を残さず食べてしまうことが多かった。一方、乾燥イトミミズ、乾燥アカムシは摂食した様子がなかった。

また松本(2000)によれば、アワフキムシ幼虫を好んで捕食するとのことであったので5月30日にスイカズラで採集した幼虫で試したところ、2日間で3頭を捕食した。6月1日には腹部が膨張していたが翌2日朝には元に戻っていた。

なお、松本(2000)により本種の生息環境で確認されて図示された幼虫は、まさしく本種の幼虫であった。

末文ながら、文献を紹介していただくとともに貴重なご意見を賜った森正人氏、森田誠司氏、情報をいただいた長瀬正義氏に厚くお礼申し上げる。

## 引用文献

- 笠原須磨生, 1980. ススキの歩行虫二種. 甲虫ニュース, (52): 6.  
 笠原須磨生, 1984. いわゆる“チュウジョウアオゴミムシ”について. 甲虫ニュース, (65): 5-7.  
 黒沢良彦, 1975. チュウジョウアオゴミムシの習性. 甲虫ニュース, (29, 30): 7.  
 松本慶一, 2000. ススキ属植物の葉鞘間に見られるオサムシ科甲虫4種の生活史に関する研究. 東京都高尾自然科学博物館研究報告, (19): 1-33.  
 須田 亨, 2016. タイワンアトボシアオゴミムシ幼虫の採集記録と生態等について. さやばねニューシリーズ, (23): 33.

(須田 亨 372-0006 伊勢崎市太田町 770-4)

## 【短報】北海道上ノ国町でルイスホソカタムシを採集

ルイスホソカタムシ *Gemphylodes ornamentalis* は体長が幅の8.5倍もありホソカタムシ科の中では細長の特異な体型で、キクイムシ類の坑道に潜り込み、それらを捕食すると言われている(青木, 2012)。本種の記録は今まで福島県が北限となっていたが(青木, 2013)、筆者は北海道で本種を採集したのでここに報告する。

1ex.(図1), 上ノ国町膳棚, 19. VII. 2017, 筆者採集・保管。



図1. 北海道産ルイスホソカタムシ。

道路工事現場の広葉樹を伐採した材積みにて、ブナ材の小口に止まっている本種を採集した。

報告にあたり、採集に同行し、採集の機会を作っていただいた小松利民氏に厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 青木淳一, 2012. 日本産ホソカタムシ類図説. 40 pp., 昆虫文献六本脚, 東京.  
 青木淳一, 2013. ホソカタムシの誘惑[第2版]日本産ホソカタムシ全種の図説. 107 pp., 東海大学出版会, 奏野。

(名越和夫 042-0932 函館市湯川町3丁目13-18 ロジェ湯川II・506)